

2010. 1. 1

No.159

編集 樋口 みな子

E-mail minginga@agate  
.plala.or.jp  
<http://briefcase.yahoo.co.jp/bc/ginganews150>  
郵便振替「銀河通信」  
02740-7-56535  
(郵送6号分1,000円)



## 新年あけましておめでとうございます

明けましておめでとうございます。

昨年1月に読者のみなさまから銀河通信20周年を祝う会を開いて頂きました。7月には22年になります。今年も発信したいことがある限り書き続けていこうと決意を新たにしています。

09年3月に父が倒れたり、母も膝の手術と今後の介護をどうするか何度もケアマネージャーさんと話し合いました。特養待機者は全国で42万人と新聞で報じていました。それも自宅で待機している人は19万9千人と半数近くを占めているそうです。とても人ごととは思えません。父は最初のE病院を2ヶ月で出され、次に個人病院へ。自宅と近いという理由で、3度の食事の世話を母と私で通いました。その負担だけでも大変でしたが、父の病状が悪化したように見えました。次に介護施設でのショートトステイ。食事が出来ず点滴をしながらお世話いただきましたが改善せず、再びE病院の個室での治療が開始されました。今回は病院でも自宅に帰すのは無理と判断して下さり、厚別にある療養型のS病院に転院になり、現在に至っています。老人保健施設にも特養にも入れず、自宅で介護されている人たちの困難さやつらさが痛いほどわかります。

そんな厳しい状況にもかかわらず、山にもずいぶん登りました。歩きながら、気持ちが解放されて楽になりました。何度も見ている風景がとてもかけがえのないものに思えました。また、NHK登山教室の講師を力不足ですが、無事に終えることが出来ホッとしています。今年は、無理せず、楽しく山に登りたいと思います。

定期購読している小さな小冊子「心のガーデニング」の中で、ある本から受け取った効用について書かれていました。自分が何をしたいかではなく、まわりから何を必要とされているのか、そのことに敏感な感性をもつこと、それがこの社会を生きやすくする。自分にとられないことの大切さを改めて考えた

という言葉に出会いはっとさせられました。私もそう生きなくてはと思います。

山岳会の通信の編集をしたり、ささやかなお手伝いなども大変と思わずにやってみると、人と人がつながっていく温かさを感じる事が出来ました。

今年もご愛読いただけます

よう、よろしくお祈り致します。ブリーフケースでも読めます。

<http://briefcase.yahoo.co.jp/bc/ginganews150>



09.12.19 シャクナゲ岳をバックに



09.12.19山容が美しいシャクナゲ岳



09.6.27 大千軒岳のタニウツギ

# 市民フォーラムを終えて

北海道高山植物盗掘防止ネットワーク委員会が結成されて今年で11年になりました。1年遅れですが10周年記念誌発行と11月7日に市民フォーラムを開きました。

私はたった一人の事務局です。記念誌が出来たのが11月6日。ネットワーク代表の小野有五さんから電話をいただき記念誌を持って新聞社に。翌日記事になり市民フォーラムは140人の市民でいっぱいになりました。

梅沢俊さんのウイットに富んだお話と、2009年に出会った花々。ミチノクフクジュソウやユキワリコザクラ、バイカツツジなどが紹介され、ブータンの珍しい花の写真は市民フォーラムのために取材したと伺い、11年間さまざな形で協力して下さったことに改めて感謝の気持ちでいっぱいになりました。佐藤謙先生の「海外でみた北海道の植物(カナダ編)」も大雪山系と共通している花が多く興味深かったです。

各地の市民団体との連携で高山植物の盗掘が激減しましたが、栽培種などその土地にない遺伝子の植物が持ち込まれている事例が利尻から報告されました。温暖化による生育地の縮小や、鹿の食害、オーバークースによる踏みつけによる被害などが深刻な問題になっています。

利尻、礼文、福島町、様似、雨竜町、夕張、旭川等全道各地からそれぞれの活動を持ち寄って交流でき無事に終えることができホッとしました。

高山植物を守るネット10周年記念誌を発行  
きまうフォーラム  
自然保護団体や山岳会、山野草愛好グループなど道内47団体が加盟する北海道高山植物盗掘防止ネットワークが10周年記念誌を発行した。監視や啓発を主体にした活動を振り返りながら、保全に向けた提言もしている。ネットワークは、出張岳での高山植物大量盗掘を機に1998年に結成。法務省に敵罰化を求めたり、啓発パンフの作製、パトロールの会や「アポイ岳ファンクラブ」など加盟団体が活動報告を行



記念誌を手にとったと成果を語る事務局の樋口さん

盗掘を機に1998年に結成。法務省に敵罰化を求めたり、啓発パンフの作製、パトロールの会や「アポイ岳ファンクラブ」など加盟団体が活動報告を行

て、10周年を記念して、7日午後1時から札幌市東区のリੰクルーム(北9東2)で市民フォーラムも開催。植物写真家の梅沢俊さんらが講演する。問い合わせは事務局の樋口みな子さん(382・9020)へ。(小坂洋右)

2009年11月26日

北海道民医連新聞

## 入山規制も

山の環境破壊

日本山岳会が意識調査

「深田百名山ブーム」などで特定の山に登山者が押し寄せ、山の環境破壊が深刻化する中で、日本山岳会北海道支部が20日、道民カレッジ「北海道の山における



自然保護の現状」を札幌市内で開催し、登山愛好家ら20数人が参加しました。同支部自然保護委員長の樋口みな子さん(元北海道動医協臨床検査技師)が

日本山岳会会員へのアンケート調査をもとに、山の環境破壊の現状や入山規制のあり方、高山植物の踏み荒らしや盗掘、山のトイレ問題などについて問題提起しました。(写真)

アンケートでは山の環境についての最大の関心事として63%が「開発による自然破壊」と回答し、47%が「地球温暖化の影響」をあげました。次いで関心の高かったオーバークースについては、その対策として74%が入山規制は必要と回答し、入山料の徴収、ツアー登山やマイカー乗り入れの規制、エコツアーなどの対策を求めています。山のトイレ問題では、「山のトイレを考える会」の活動や利尻山の先進的な取り組みが紹介されました。

フォーラムの最後に私の事務局長退任を小野有五さんがねぎらって下さり、すてきな花束をいただきました。来春からはアポイ岳ファンクラブで事務局を引き受けて下さることになりました。

終わってからたくさんの方から「お疲れさまでした」と声をかけていただきました。肩の荷がおりました。



思いがけない花束に感激

## 道民カレッジで初めての講師を体験

日本山岳会の公益事業の一つとして、道民カレッジに道支部が参画することになり、大変気が重かったのですが、いままでの自然保護の活動を語ればいいのかという後押しでトップバッターを引き受けました。話すことは苦手だし、何か専門に勉強したわけでもありません。

11月20日にかける2・7で「北海道の山における自然保護の現状」について資料とパワーポイントを使って話しました。20数人の参加でした。運動にまつわるエピソードもたくさんあるのですがどのように伝えたらいいのかとまどいました。数人の会員から「良かったよ」というメールを頂いたのが嬉しかったです。山とは無縁の方たちには十分には伝わらなかったかも知れませんが、山の自然を考えるきっかけになればありがたいです。

山のトイレ問題についてはバイオトイレの仕組みなど、資料を読んで勉強したり、わからないことは聞いたり利尻富士町に問い合わせたりパンフレットを送ってもらったりしました。利尻ルールは素晴らしい取り組みです。市民運動と行政とが連携することの大切さを教えられました。

## みんなで考えよう!川から見える北海道の未来

09年1月28日に「みんなで考えよう 川から見える北海道の未来」フォーラムが北大学術開館で開かれました。

政権が変わって八ツ場ダムと川辺川ダム建設は中止になりました。サンル川も中止に持ち込みたいと市民団体が、反対運動をしています。

サンル川の豊かな自然を映像で佐々木聡さんが紹介しました。小野有五さんはサンル川と森を生かした持続的な地域振興のシナリオを具体的に提示。素晴らしいサンル川を地域の財産として生かした町づくりをと語りました。

右の写真は「北海道の森と川を語る会」で制作、発行した小冊子「世界にたったひとつのサンル川」です。サンル川は多数のサクラマスが遡上し、絶滅危惧種のカワシンジュガイも生息する貴重な河川であることを紹介しています。ダムをつくらなくても想定する最大の洪水でも、堤防の上まではまだ平均2mの余裕があること。一部ないところは、堤防を整備すれば十分間に合うことを訴えています。絵は林恭子さんが水彩画で描きました。誰もが見てわかりやすく、サンル川がどこにもない素晴らしい自然であることを素敵な絵で伝えています。

滝上の渚滑川とトラウトを守る会の富山さんが、パワーポイントで素晴らしい自然が町の活性化につながったことを話し、登別モモンガクラブの吉元さんが幌別川での野外活動などを紹介。いずれも初めて知った団体で、自然を生かして、地域に住む人も元気になれるというお話でとても新鮮で良かったです。



## 待望の雪にホッと



09.12.19 雪がたっぷりのチセヌプリで



京極山荘の夜は更けて

12月19日、チセヌプリスキー場に着いたのが11時近く。日本海側は雪が大量に降り、スキー場もオープンしているかもと期待しましたがまだ整備されておらず、リフト横からKさん、イチロウさん、みな子@銀河の3人で山スキーで11時半に出発しました。すでに何組かの登山者のラッセルした軌跡があり、ありがたく使わせていただきました。1時間でリフト終点に着きました。そこから左に入り、正面にチセヌプリを見ながらなだらかな斜面を歩き、シャクナゲ岳とビーナスの丘が美しく見える850mの平坦地で、登りは終了し、往路を下山しました。

イチロウさんのスキーのシールが不具合だったり、シールを外した後もトラブルが発生したらしく、一番スキーの下手な私が、リフト下でしばらく待って合流しました。スキー場に15時着。雪秩父温泉で汗を流し、京極山荘に。

しばらくすると後陣の秋ドルチェさんとsimaさんが到着。山形芋煮と持ち寄りのお酒で夜遅くまで話が弾みました。

翌日はゆっくりと朝食、昼食のサンドイッチをつくり、山荘を10時に出発。ニセコモイワ山はすでにオープンしていました。ボーダーたちが深雪を求めてたくさん楽しんでいる中、K、イチロウ、秋ドルチェ、みな子@銀河の4人はリフト横から登り始めました。私はみんなに付いて行くのが大変でした。リフト最終点近くに12時半。シールを外し、猛烈な深雪にスキーが何度も埋まりながら滑降? Kさん、秋ドルチェさんは先行。私も苦勞しながら、滑降していくと、イチロウさんはスキーのビンディングが外れて片方の足はすっぽり埋まりながら、直すのに悪戦苦闘中でした。私はどうすることも出来ずKさんに携帯すると、林道で二人で待っているから、そこまでつぼで降りて欲しいとの返事。イチロウさんは、ものすごい積雪に体半分埋まりながらスキーを背中にかつぎ林道までたどり着きました。Kさんがいとも簡単に外れたビンディングを直したのにはびっくり。その後は、整地された林道を快適に滑降。4人そろって無事に下山することが出来ました。

遭難は雪崩だけではないことを学んだ貴重な経験でした。

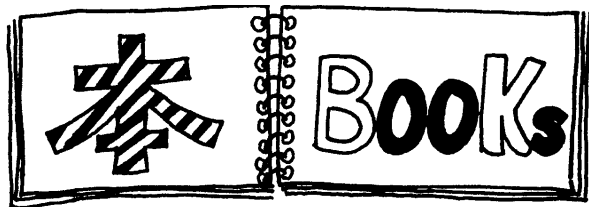
雪がなかなか降らず、やっと待望の雪を楽しみました。12月6日の三段山はブッシュだらけ。なんとか2段目過ぎたところまで登りましたが下山は、ブッシュに引っかからないように恐る恐るです。

仲間は何度も豪快に転倒して苦勞しながらブッシュから脱出していました。私も転びましたが、起きあがるのにすごいエネルギーを使うので滑るというよりは足を踏ん張って歩きました。

今年は少しでも山スキーが上手になることが目標です。



09.12.6 ブッシュだらけの三段山



## 「加藤周一が書いた加藤周一」

91の「あとがき」と11の「まえがき」

鷲巣 力（編） 平凡社 1800円



昨年12月に89歳で亡くなった加藤周一氏はたくさんの著書を残しました。170冊以上というのですからすごい数です。私は朝日新聞夕刊に連載されていた「夕陽妄語」が楽しみでした。加藤氏の文章は簡潔でムダがなく、主張や論点が少しもぶれることなく、今の時代を考えるよりどころでした。

たくさんの著書に付けられた「あとがき」と「まえがき」だけを年代順に収めたのが本書です。

あとがきには特徴があり、どんな時代状況の中で、自身は何をして暮らし、なぜこの文章を書いたかを語りかけています。音楽や文学を愛し、世界中を旅した加藤氏の素顔が見えてきます。

1979年代「現代の政治的意味」のあとがきには「私は政治を好まない。しかし戦争とともに政治の方が、いわば土足で私の世界のなかに踏み込んできた。私はやむを得ず、周囲の政治的現象に何らかの反応をするほかはなかった。その反応の形式は言論である」とし「時代の証言を、言論の間接の効果の一つとする。68年の夏、プラハの市民の言論はソ連の戦車を追い返すためには全く無効であった。しかし戦争の意味を明らかにするには見事に有効であった。歴史は意味のない行動の継起ではなく、行動の意味の連鎖である。68年夏のチェコスロバキアで歴史を作ったのは、言葉と戦車であり、決してその一方ではない」。有名な「言葉と戦車」（世界）は筑摩書房から、ちくま学芸文庫「言葉と戦車を見すえて」として出版されています。

加藤氏は「九条の会」の呼びかけ人になりました。「改憲は必要か」のまえがきには「九条は交戦権放棄です。九条改めは交戦権放棄の放棄です。そして戦争はある日突然、天から降ってこるものではなく、長い「なしくずし」の過程の果てに起こるか、小規模の戦闘の「なしくずし」拡大を通して泥沼化するものです」とあり、人権が尊重されたり、報道や言論の自由が拡大されるだろうかと想像力を働かせることの大事さを語っています。日本は中国を侵略し人道的に許し難い蛮行で、2000万人の人命を奪いました。半世紀もたっているのに日本は中国に対して謝罪の言葉もありません。加藤氏は戦後ドイツは隣国の深く広汎な反独感情に対して「過去の克服」に全力を傾け半世紀に及んだ。それに対して日本は半世紀を浪費した。と厳しく批判しています。全く同感です。

あとがきには、加藤氏の伝えたいエッセンスが込められています。著書のおおよその内容がわかり、本を選ぶ参考にもなります。

自伝的著書の「羊の歌」と「私にとっての20世紀」しか読んでいませんが、この本をきっかけに他の著書も読みたいと思いました。

## 「心と響き合う読書案内」小川洋子著 PHP新書 840円

未来に残したい文学遺産を紹介するラジオ番組が東京FMでスタートしたのが2007年7月。作家の小川洋子さんは「この番組は文学的な喜びの共有の場になってくれるのではないだろうか」と考え、出演することになったそうです。

本書は、このラジオ番組の1年分の放送をもとに再構成したものです。春夏秋冬の4章からなる読書案内で、52冊の古今東西の名作が紹介されています。ラジオ番組ですからバックには音楽が流れているのです。本と音楽のハーモニーで、聴いている人は豊かな時間を過ごしたのではと思いました。それぞれの本の神髄を短いセンテンスで表現しているのも素晴らしいです。



人間が虫になる不条理より不気味なものを描いている「変身」（カフカ）、言葉では書けないことを言葉で書く「風の歌を聴け」（村上春樹）、言葉によって、人間は自由になれる「アンネの日記」（アンネ・フランク）、自分のために詠まれた歌が必ずある「万葉集」・・・といった具合です。

金子みすゞの詩について「どの詩にもどこか寂しさや切なさがあります。しかも一個人の感情を超えている。人間という存在が大地に跪く時、大地から響いてくる寂しさ、切なさなのです。高い場所からではなく、地べたに這いつくばって世の中を見ている詩ばかりです。土や草をモチーフにした詩が多くまた海を歌うにしても海の底を歌っている。こうした作者の姿勢の低さが大勢の人の心を打つ要因ではないでしょうか」と語っています。

私が好きな詩は「空と海」です。春の空や海がやさしいのは、かくされた星や真珠の力だといっていて、自然を見る感性に感動します。どの詩にも小さな命によせる共感があり、私もこのままでもいいよと肯定されているようで心が軽くなります。

私が中学時代に読んだ本2冊も紹介されています。「銀の匙」中勘助の紹介は「磨けば磨くほど真実そのものに近づいていく。子どもの瞳に映し出された風景が言葉になって浮かび上がってくる。そういう文章だと思います」とありました。

当時、私も体が弱かったので、主人公の少年と自分を重ねて読んで覚えがあります。情景描写が美しく今も心に残っています。「アンネの日記」もアンネと同じ年頃の時に読んでいます。ナチスドイツの占領下のオランダ・アムステルダムで2年以上にわたり隠れ家生活をした少女アンネが残した日記から、アンネの息づかいが伝わってきました。

小川洋子さんはアンネの隠れ家を訪ねてこう書くのです。「日記にも出てくる西協会の鐘が聞こえてきて、中庭の緑が鮮やかでした。何もかも美しいのに、アンネ・フランクはいない。誰もいないということが、何と残酷なことだろうと身に沁みる思いでした」。とありアンネの断ち切れた人生の無念さに改めて胸がいっぱいになりました。

その他の本では「銀河鉄道の夜」宮沢賢治、「夜と霧」V・E・フランクフル、「朗読者」ベルンハルト・シュリンク、「羅生門」芥川龍之介、「ながい旅」大岡昇平等。それぞれの本への深い共感があり、よく知っている本も新たな発見があり再読したくなります。小川さんの紹介で未読の本にもとても興味が持てました。



## 「若き友人たちへ」—筑紫哲也ラスト・メッセージ

筑紫哲也著 集英社新書 720円

筑紫さんが亡くなって1年。がんと闘いながら残した連載と、03年～08年大学院での講義録をもとにしたラスト・メッセージです。

憲法や教育問題、新聞、雑誌、テレビジャーナリズムのあり方、沖縄問題や日本人論や国家論までを展開しています。講義テープをおこして新書にしたものなので、目の前の私たちに語りかけているかのようです。

私が特に印象に残ったのは「沖縄から日本が見えるか？」と学生に問うている章でした。筑紫さん自身、9歳で2つの場所、群馬と大分で疎開を経験しています。また返還前の沖縄支局で、米軍統治下の返還交渉を取材した人です。「沖縄で、家族のなかに死傷者のいない家はないと言われるほど。だから戦争が終わってももう家族がいない。その後をこの子たちはどうやって生き延びたか。そこまで過去に想像力を働かせることが出来るかどうか」と問う場面。

私も90年に家族で沖縄を訪ね、地上戦で集団自決したチビチリガマを目にした時の衝撃は今も忘れません。ニュース23でも筑紫さんほど沖縄を取り上げたキャスターはいないと思います。沖縄の今を伝え続けました。辺野古基地が移転問題で揺れています、生きていたら筑紫さんならどう考え発信したのだろうかと思えます。

日本人論では、日本人の感情の根底には判官びいきがあったが、最近では「勝ち馬に乗る」傾向があると指摘しています。小泉ブームもその一例としてあげています。情報に流されずに自分の頭で考えることの大切さを繰り返し語っています。

「そして、この国の行方は・・・」の章では「日本がアジアで孤立する道を歩み始めた起点が2005年だった。靖国問題はシンボリックだったんですが、そのなかでナショナリズムというものが特に若い世代にどんどん強まっていくという状況がまさに今じゃないかと」と語っています。

この本には筑紫さんが若い人たちに伝えたい大事なメッセージがたくさん詰まっています。

ニュース23で、力の強いもの、大きな権力に対する監視役を果たそうとし、多様な意見や立場の人を登場させることで、この社会に自由な気風を保とうとした筑紫さん。私も自分の頭で考え行動するひとりでありたいです。

あとがきに代えて16歳の時に書いた自叙伝のなかに筑紫さんのジャーナリストの芽ばえを感じました。

## 週刊朝日 MOOK「筑紫哲也」永遠の好奇心

朝日新聞社 933円

朝日新聞記者から朝日ジャーナルの編集者、News 23のキャスターとさまざまなメディアで活躍した筑紫さんの足跡と、井上陽水、菅直人、坂本龍一、小澤征爾、姜尚中、瀬戸内寂聴、中島みゆき、養老孟司（敬称略）ら各界の35人が語った知られざる筑紫さんのエピソードなどを満載。筑紫さんの魅力を浮き彫りにしたのが本書です。

沖縄をこよなく愛し、京都では五感を解き放ち、散策に明け暮れました。いつか住みたいと家も購入していたそうです。



立花隆さんが中心になって聞き取りをした「筑紫さんのオーラル・ヒストリーを聞く」が読み応えがあります。

筑紫さんが中学2年生の時に、学級新聞に熱中したことが語られます。その動機は戦後民主主義。生徒会を民主的な形で選び直そうということを始めます。新聞記者になったのも、戦後民主主義と多少関係があるように思うと語っています。若き日の筑紫さんが、ものを書くのは嫌いではないのに、人に会うのが苦痛だったと明かします。

私も高校時代は新聞部で勉強そっちのけで夢中になったことがありましたし、転校を繰り返したせいかなかなか人とうち解けられなかったのです。その後遺症は大人になってからも続き、市民運動の機関誌の編集をしてい頃、初めての方に原稿を依頼するのがとても苦痛だったことを思い出します。電話の前でいつまでも立ちすくんでいました。筑紫さんの、人と親しくなっても濃密な関係とは距離をおいているような慎みが私には好ましく思えました。

転機になったのが1968年から70年までの沖縄での特派員時代、自分の国に対する違和感を持ってたと語っています。ワシントン特派員のときには、ウォーターゲート事件を取材します。その後、朝日ジャーナルに異動。「若者たちの神々」が評判になりました。ニュースキャスターは18年間も勤めましたが意外にも自分にあっていたのは「編集者」だったと語っています。

私のNews 23のもう一つの楽しみは、映画や音楽の紹介でした。ハリウッド映画が嫌いで、「人間の映画」が好きだと知り共感しました。フィンランドのアキ・カウリマスキやギリシャのアンゲロプロスが好きなことも嬉しかったです。ケン・ローチはどうですか？と聞いて見たかったです。

政治学者の藤原帰一さんは「筑紫さんが書かれたものを読み返すと一會った人とのエピソードを重ねていくことで自然と話が転がっていく、そんなコラムを多く綴っていました。なにを書くにもなにを伝えるにも、筑紫さんのまなざしは人に向けられていたのです」と語っていてNews 23でも、ただ事実を伝えるだけでない奥行きを感じたのは緻密な取材があったからだと言っていました。筑紫さんが亡くなってから夜のニュースがつまらなくなりました。

妻からみた夫、息子から見た父親像も興味深かったです。



「カティンの森」アンジェイ・ムラルチュク著 工藤幸雄/久山宏一訳  
集英社文庫 876円

1939年9月、ポーランドに侵攻したソ連軍の捕虜になったポーランド人将校1万数千人が、翌年ソ連軍に虐殺され、長くナチスの犯罪とされたカティンの森事件。この事件で父を奪われたアンジェイ・ワイダ監督の映画の原作小説です。

著者は多くの「カティンの森」事件関係者に取材し、史実に基づいて書かれたのが本書です。

時代に翻弄されながら生き抜く人々の悲しみや喜びが描かれます。奇跡的に生き残ったアンジェイの部下であったヤロスワフが政治的な力で殺されてしまいます。娘の恋人も・・・。

残されたアンジェイの手帳には家族を思う気持ちがあふれていました。半世紀を経て、考古学者になった娘ヴェロニカが訪ねた、カティンの森の描写が当時を想像させて圧巻です。

著者は「モデルになったシラスキ家の人々の感情を追体験できたとき、私はそれを他の犠牲者とその遺族に関する資料を使って拡大させることにしました。そして自分の共感を通して、これらの人々のドラマを我がことのように追体験できるようになりました」と訳者あとがきに記されています。

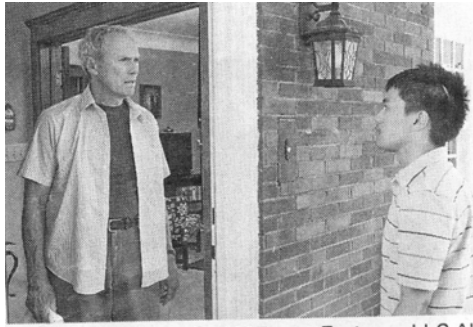
すでに上映が始まったアンジェイ・ワイダ監督の「カティンの森」も観たいです。

購読料をありがとうございます 09.10.15~12.24 (敬称略)

福原正和 (札幌市) 5,000円 (カンパも含む) 三野裕輝 (札幌市) 2,000円 (12号分) 高橋宜也 (札幌市) 5,000円 (カンパも含む) 高島拓生 (嘉府市) 5,000円 (カンパも含む) 福田光子 (秋田市) 2,000円 (12号分) カレンダーも 村上力 (釜石市) 3,000円 (カンパも含む) 梅沢俊・節子 (札幌市) 2,000円 (カンパも含む) カレンダーも 吉野勝夫 (美幌町) 2,000円 (12号分) 菅沼宏之 (札幌市) 2,000円 (12号分) 高野ケイ (札幌市) 2,000円 (12号分) 中村秀子 (千歳市) 3,000円 (18号分) 青柳志郎 (北広島市) 2,000円 (12号分) 安田成男 (札幌市) 宮下弘 (札幌市) 3,000円 (カンパも含む) 渋谷正己 (旭川市) 数字の記入のない人は6号分、世古勇 (江別市) 切手10,000円分 疋田英子 (稚内市) 切手1,000円分 合計40,000円と切手は印刷と送料に使わせて頂きます。ありがとうございます。

11月、12月は山に行かなかった分、映画をたくさん観ました。たいていが平日の昼間です。7ページで紹介しきれませんでした。 「レスラー」の主役ミッキー・ロックのレスラーに全人生をかけた壮絶な生き方に涙が止まらなかったです。「ロルナの祈り」「ゼロの焦点」も印象深かったです。(み)

# 映画



『グラン・トリノ』©2008Focus Features LLC.All

## 「グラン・トリノ」

クリント・イーストウッド監督・主演（米）

妻に先立たれ一人暮らしのウォルト（イーストウッド）は息子達も寄りつきません。定年まで自動車工を勤め上げたウォルトの楽しみは、愛車のグラン・トリノを眺めること。ある日、不良たちにそそのかされた隣に暮らす少年タオ（ビー・バン）がその愛車を盗もうとしたことがきっかけで、ウォルトの家にタオが通

うようになります。

タオたち家族は東南アジア系の移民モン族でした。最初は毛嫌いしていたウォルトが、モン族の豊かな文化と人間性に触れて、心優しくなっていくのがいいです。タオに息子のような感情を持ちはじめ、大工仕事を教えるのです。

ウォルトは朝鮮戦争のとき、敵の少年兵を殺し、いまだ消えぬトラウマに苦しんできたことが明かされます。この映画に深みを与えているのは、イーストウッドが戦争は勝っても負けても双方に深い傷を負わせるのだと訴え、人間性を見つめさせていることです。

タオ一家を苦しめる問題に、ウォルトは思いがけない決断をします。弱者を苦しめる強者への怒りがストレートに胸に響きました。

イーストウッドの最近作では「硫黄島からの手紙」「チェンジリング」などが話題になりました。どの映画も見っていますが、どれよりもこの映画が09年の傑作だと思います。

泣けました。エンディングの音楽も心にしみて、誰も場内が明るくなるまで席を立たないのも印象的でした。

78歳とは思えないイーストウッドの目の強さ、背筋もしゃんとしてカッコ良かったですよ。

## 「沈まぬ太陽」 若松節朗監督

山崎豊子の原作です。航空会社の労働組合委員長として、労働条件や空の安全を求めて闘う恩地元（渡辺謙）。しかし懲罰人事でパキスタン、イラン、ケニアと10年間も勤務させられます。共に闘った行天（三浦友和）は重役に昇進。会社の執拗な嫌がらせが続く中で、御巢鷹山での航空至上最大のジャンボ機墜落事故が起きます。遺族の悲しみをよそに会社の収益と利権を守ろうとする経営陣と政治家たち。

日本航空の経営破綻は、この頃から始まっていたのだかと、映画というより実際の航空業界の実態を目の当たりにしているかのような感じでした。恩地は遺族の怒りと悲しみを逃げずに受け止め、空の安全を守るために、新会長の下で改革チームの部長として闘うのです。巨大な組織のなかで自分を見失わずに、人間としての尊厳を守り通した恩地の生き方がすがすがしい。でももっと周りでは支えられなかったのだろうかという疑問が起きました。安心・安全であるべき交通機関が、経営効率ばかり優先させてきた実態が、映画とはいえここまでひどいとは思いませんでした。

「沈まぬ太陽」の太陽は、人間としてこれだけは譲れないと闘った恩地の生き方と、効率ばかりを優先する会社とのせめぎあいのなかで、それでも屈しない希望のよりどころを示していたように思いました。3時間22分の長編ですが、時間を感じさせず、久しぶりに社会派の壮大な映画でした。

恩地の人間としての優しさは、御巢鷹山での事故での遺族との対応ににじみ出ていました。今どき、珍しい信念の人に勇気づけられました。骨太な人物像を渡辺謙が見事に演じきって圧巻。



## 「スラムドッグ\$ミリオネラ」ダニー・ボイル監督（英）

インドのスラム街で育った18歳のジャマールが、クイズ番組で正解を重ねていきます。15の難問が15の回想シーンにつながり、1問ごとに少年の過去が語られます。教育を受けていないのに答えられるはずがないとイカサマの疑いをかけられ逮捕されるのです。華やかなクイズ番組のシーンと、警察での尋問シーン、そして彼の生い立ちのシーンとが見事に結びつき、次第にストーリーが明かされていきます。ジャマールがクイズ番組に参加したのはお金が欲しかったからではありません。初恋の少女にもう一度会いたいという思いでした。

インド・ムンバイの躍動感あふれる映像が素晴らしい。私はインドの雑多な景色や音がまるで目の前にあるかのような臨場感を味わいました。

愛と希望だけを手に生き、運命を切り開いていくジャマールに私も手に汗握って応援していました。

# これからは人のために知恵や体力を役立てたいと思います。

銀河通信が今年7月で22年になります。拙い通信ですが多くの読者に支えられて今日まで歩いて来ることができました。読者は私のもうひとつの大きな家族のようです。決して人付き合いがいいほうではありませんでしたが、困難なときほど読者であり友人たちの励ましが嬉しかったです。

若いときは自分が何をしたいかばかりにとらわれていましたが、人のために何か役に立てるなら、私という存在が生かされることだと気づきました。下記は友人であり、読者でもある福原さんの投稿です。心揺さぶられました。苦しいときはそれどころではないかも



銀河通信発行20周年をお祝いする会

知れませんが、私もこれからは前向きにいろんなことに取り組んでいきたいと思っています。

北海道新聞 09.10.14

## あまりに惜しい 2人の医師の死

医師 福原 正和  
(札幌市北区・60歳)

先日、友人で共に50代で亡くなった男女2人の医師の「お別れの会」がありました。1人は山で遭難し、もう1人の女医はがんで亡くなりました。どちらの会も訃報はなく、弔辞と献花のみでした。

感動したのは両方とも多くの患者さんが参加していたことです。小児麻酔科医だった男性の友人は、人工呼吸器をつけなければならぬ多くの重度心身障害児の主治医で、患者さんをお風呂に入れるために日々看護師さんと汗を流し、そのお礼の言葉が患者さんの家族から述べられました。女医は自らのがんを知りながら、周りの人には愚痴を一切言わずに最後まで診

療を続け、いよいよになって、診療を続けられないおわびとお礼のチラシを書き患者さんに配りました。彼女の最後の仕事として、平和のために、「医療九条の会・北海道」の幹事として情熱を注いでいたことも会場で紹介されました。

男性医師の弔辞にあった「別れの悲しみよりも出会えたことの喜びを」の一節を胸に刻みつつ、医療不信がいわゆる昨今、患者さんに慕われた2人の医師の死はあまりにも惜しい、と私は強く感じたのでした。



09.12.22 空の青さにナナカマドの実が美しく、綿帽子を乗せてブランコしているようでした。



09.12.18 撮影・松澤秀郎さん(阿賀野市) 自宅のログハウスから見た阿賀野川と菅名岳連峰



撮影・村田孝嗣さん(弘前市) エナガの写真を送ります。北海道でも雑木林に普通に見られる野鳥です。かわいいので大好きな野鳥です。今朝もシジュウカラの群れと一緒に十羽ほど混っていました。「ジュリ ジュリ ジュリ」と声を交わしながら移動していきました。



撮影・村田孝嗣さん 白神山地、太夫峰(たゆうみね)のヤマネ 天然記念物に指定されて森の妖精ともいわれています。エゾモモンガに似ていますね。

3枚の写真は銀河通信へ投稿して頂きました。美しい冬景気や珍しいヤマネ、可愛いエナガの写真ありがとうございました。



09.12.2 かみゆみさんの結婚を祝って



左 09.2.8 三角山でイグルーを作りしました。



09.11.28 「世界にたったひとつのサンル川」のすてきな絵を描いた林恭子さんを囲んで